

創作の軌跡

—エミリー・ディキンソンの詩の異稿研究(1)—

稲田 勝彦

はじめに

現在, Emily Dickinson(1830-1886)の詩の正テキストとされているのはThomas H. Johnson編集の*The Poems of Emily Dickinson* (1955) (以下『ED詩集』と略記する)である。¹⁾ このテキストの特長は, “Including variant readings critically compared with all known manuscripts” という副題を持つように, 編者がディキンソンの最終稿であろうと判断して採用した詩(以下「採用稿」と称する)に加えて, 存在するあらゆる形の異稿を載せていることである。従来, これら異稿は採用稿を解釈する際の参考資料程度にしか扱われてこなかった。これに対して, 異稿を採用稿に劣らぬ重要なテキストであると考え, 詩の採用稿, 異稿それに書簡をトータルなテキストとして位置づければ, ディキンソン研究に新たな可能性がひらけるのではないか, というのが本研究の動機である。たしかに, ある詩人の人と作品について論じる時は, ひとつの共通した不変のテキストを基にすべきであって, 完成途上にある作品や下書き程度原稿まで考察の対象にすることは無用の混乱を起し, 好ましいこととは言えないということはあるだろう。しかし, ディキンソンの詩の豊富な異稿は, 彼女の創作活動, 創造精神の働きや詩作の過程に関して, 読者の想像力を掻きたてないではおかない魅力を持っている。

例をひとつ挙げてみよう。“I taste a liquor never brewed —” (214番)の最終連は, 採用稿では次のようになっている。

Till Seraphs swing their snowy Hats —
And Saints — to windows run —
To see the little Tippler
From Manzanilla come !

ディキンソンは, この詩の原稿の最下部に, 最終行の代替行として“Leaning against the — Sun —”を書きこんだ。この異稿を見るたびに, 筆者はまず“From Manzanilla come!”よりは“Leaning against the —Sun —”の方がずっとすぐれているのと思わずにいられない。そして, ディキンソンはいつ, どんなつもりでこの代替行を書き加えたのだろうかと思議に思う。ディキンソンが最初 “Manzanilla”(ラム酒の輸出からキューバ南岸の重要な商業都市“Manzanillo”を連想したものとされる)²⁾ という語を用いたのは, この語が持つ彼女好みの異国情緒のゆえであったと思われるが, この行に×印をつけて「太陽にもたれかかって」とい

う代替行を書きこんだ時、その背後にどんな芸術的・心理的動機があったのだろうか。この例では、ただ代替語句が書きこんであるだけなので、ディキンソンが最終的にこれを採用するつもりであったかどうかはわからない。しかし、ある詩に創作初期の原稿を含めた2種類以上の原稿があって、しかも代替語句の記入などがある場合、私たちは Shall I take thee, the Poet said / To the propounded word? / Be stationed with the Candidates / Till I have finer tried - (1126番) という詩行が告げているディキンソンの創作過程をリアルに追体験することができるかもしれないと思うのだ。

このような関心と動機からディキンソンの詩の異稿を分析し、その意義を考察しようというのが本論文の目的である。手順としては、まず対象とするテキスト『ED詩集』成立の過程を明らかにする必要があるだろう。実際、ディキンソンの詩のテキスト成立の過程は、複雑でありながら、パケットの配列や詩の創作年の推定に関すること以外はあまり問題とされてこなかったところがある。次にディキンソンの詩の異稿を定義し、異稿を形態的に分類するなどして、異稿の実態を明らかにする必要がある。さらに『ED詩集』の編者がどのような原則に立って複数の詩の原稿から採用稿を決定したかも見なければならぬ。そのあとではじめて異稿の内容的分析に入ることが可能になる。

ディキンソンの詩の異稿は私たちに何を語るだろうか。仮説としては次のようなことが考えられる。ディキンソンの詩の異稿は、まず、彼女の創作活動の実態を浮き彫りにしてくれるだろう。異稿は、28才の頃から本格的に詩を書き始めたディキンソンが、作った詩を推敲し、あるいは、知人、友人に書き写しては送るという生活を送ったことを物語るドキュメントでもある。第2に、異稿は一篇の詩の創作の初期の段階から完成にいたるまでの過程を示す。ディキンソンはどのようにして詩の「種」を得たか、どのようにしてこの「種」を発芽させ、成長させあるいは矯正し、そして開花させたかが観察できるかもしれない。第3に、彼女の異稿は彼女の言語選択のパターンや要因を示す。すでにいちど書きあげた詩に手を加えようとする時、そこには何らかの思想的・心理的・言語的要因が作用していたはずだ。先人や同時代人の著作の影響を見ることができるかもしれないし、ディキンソンのジェンダー意識の働きを伺うことができるかもしれない。

ディキンソンの異稿をひとつひとつ検討しながら以上のような仮説を検証することが本研究の主たる目的だが、本稿は、紙面の制約上、主として1) テキストの問題、2) 異稿の形態的分类、3) 採用稿決定の問題など、いわばディキンソンの異稿研究の基礎的作業にあてられている。詩人の創造精神の働きや創作過程の考察は次稿においておこなう予定である。

1. テキスト

現在もっとも権威あると考えられているディキンソンの詩のテキスト『ED詩集』は、詩人の死後、1890年から1945年にかけて詩集や書簡集で出版された詩1734篇と、編者がはじめて公刊する詩41篇の計1775篇の詩からなっている。編者ジョンソンがとった『ED詩集』編集の方法は次のようなものであった。ディキンソンの死後、妹 Lavinia が Mabel Loomis Todd の所に持ちこんだ姉の詩の草稿の束は、レターペーパー1枚を二つ折り4頁にして、これを通常4～6枚重ね、左側を細ひもで綴じてあたかも小詩集のようにした冊子 (packets), 綴じてはないが綴じる予定であったかのようにまとめられているもの (loose sheets), および封筒に入った多数のバラバラの断片 (work-sheet drafts) からなっていた。³⁾ トッド夫人の夫は、これらポケットや封筒に任意に1-38, 40, 80-110の番号をうったが、このうち1-83は完全に綴じられたポケット, 84-98はルース・シート, 残りはワークシート稿および断片であった。これらの草稿は、その後さまざまな曲折を経てハーヴァード・アマースト両大学図書館の所有するところとなったが、ジョンソンは、これらの草稿と私信の形で送られるなどして「16の機関と40人以上の個人に所有されている」⁴⁾ ディキンソンの自筆原稿, Susan Dickinson やトッド夫人が書き写していたコピー原稿, および、すでに出版された詩集や書簡集などあらゆる資料を集め、草稿の筆跡, 用紙の質, 色, 形状, 表記の特徴, 書きこみ等を検討して、ポケット内の詩を入れ替えつつ1775篇の詩を決定し、それらの創作年を推定し、年代順に並べたのであった。

『ED詩集』が、ポケットの再構成のやり方, 原稿の読みとり, 決定稿の採用, 創作年・順序の推定等に関して、多々改善すべき点を持っていることはすでに指摘されていることであり、また、特に詩の創作年の推定については「正確な創作年月日がわかるものは非常に少ないので、創作年はすべて相対的なものである」⁵⁾ と、編者自身も認めるところであった。『ED詩集』の不完全性については、R. W. Franklin が *The Editing of Emily Dickinson: A Reconsideration* (1967) においていち早く指摘したが、フランクリンはさらに *The Manuscript Books of Emily Dickinson* (1981) を著わして、ジョンソンが、ポケットおよびルース・シート間の差し替え、作品の経歴、構成、連の配列、句読点、語句、異稿の読みとりに関して誤りを犯していることを十分な説得力をもって証明して見せた。従って、ディキンソンの詩の改作の跡をたどろうとする本研究において、フランクリンが指摘するような不完全性を持つ『ED詩集』をテキストとすることには問題がないとは言えないが、フランクリンの指摘は必要に応じて参照することとして、原則として『ED詩集』に拠ることとしたい。

2. 異稿

ディキンソンは、1858年に、自分が書いた詩をポケットにまとめはじめた。それ以前にも彼

女は詩を書いていたはずだが、1858年以前の詩はわずか5篇しか残っていない。しかし、1858年になって、彼女は「Charles Wadsworthという詩神を得て」⁶⁾ 驚異的な創作意欲を見せ、1858年には52篇、1859年、94篇、1860年、64篇、1861年、86篇、1862年には366篇もの詩を書いている。1866年以降は、彼女の憑かれたような創作意欲は衰えたが、それでも亡くなる前年まで毎年平均30篇以上の詩を書き続けた。この頃のディキンソンの日常は、家事仕事をおこなうかわら、手近にある紙切れに思いついた詩行を書きとめ、推敲しつつひとつの作品に仕上げ、それを清書してポケットに収める一方、縁者や知人、友人にポケットの詩を書き写して送ったり、また、折に触れてはポケットを取り出してはその中の詩の改作を試みるというものであったと思われる。ディキンソンは、詩をポケットに収める前におそらくは幾度か書き直したであろうから書き直しの原稿もあったはずだが、それらは廃棄してしまったらしく、ほとんど残っていない。しかし、彼女はポケットの詩を書き写して人に送る時しばしば改訂を加え、明らかに創作意欲が減退した1866年以降は、彼女の詩は半完成稿や粗原稿の段階のものが多くなっていくので、彼女の詩の異稿は結構多いのである。

ジョンソンはディキンソンの詩の異稿を“variants”という言葉で表わしたが、彼の言う“variants”とは、詩人が行末や行間に書きこんだ代替語句や行だけを意味した。しかし、本稿で言うディキンソンの詩の異稿とは、主として、ディキンソンがポケットの詩をコピーして他の人に送ったりしたためにひとつの詩に対して複数の原稿が存在する場合、『ED詩集』の採用稿とならなかった原稿、および、詩人自身による代替語句の書きこみがある採用稿を意味する。従って、まったく異稿のない詩は考察の対象とはならないわけである。筆者の調査によれば、『ED詩集』の1775篇の詩のうち、まったく異稿を持たない詩は半数弱(850篇、48%)であった。ちなみに、これらまったく異稿を持たない詩のうち、約四分の三(654篇、77%)はポケットの中の詩であり、約四分の一(196篇、23%)は人に送られた原稿等である。

従って、私たちの考察の対象となる異稿は1775篇の半数強の詩(925篇、52%)ということになるが、これら925篇の詩の異稿は、大別すれば次のような形をとっている。

A. 採用稿がふたつの異なる版(version)を持つもの。

ある詩に複数の原稿が存在する場合、編者がひとつの採用稿に絞りきれずにふたつの異なる原稿をそのまま採用した場合が少数ながらある。⁷⁾ そのもっとも有名な例は“Safe in their Alabaster Chambers”(216番)であろうが、これらは version I, version II等として並記され、version I・IIの間でまったく異なる連を持つこともあれば、部分的に語句が異なるだけのこともある。これら version I・IIは、相互に異稿として検討するに値する。たとえば、“Going to Him! Happy letter!”(494番)では、version IとIIの間の主な違いは“Him”が“Her”になっていることだが、この改変は詩の受取人を考慮した結果だと思われる。また、“The Wind

begun to Knead the Grass” (824番) の first version と second version の間の主たる違いは、冒頭の2行が The Wind begun to Knead the Grass / As Women do a Dough — という女性、主婦のイメージから、The Wind begun to rock the Grass / With threatening Tunes and low — という威嚇的なイメージへと変わっていることだが、これが意味するところが何であるかも考察に値するであろう。

なお、たとえば “No ladder needs the bird but skies” (1574番) の終わりの4行が部分的に改変されて “To her derided Home” (1586番) の最終4行に使われているように、独立した詩として採用されていないながら別の詩の一部に組み込まれているものが4篇あるが、⁸⁾ これらもここに分類することとする。

B. 複数の原稿がある場合の採用稿以外の原稿。

ディキンソンは、しばしば、スーザン・ディキンソンやその子供たちなどのような親類、T. W. HigginsonやSamuel Bowles 夫妻などのような友人に、パケットの詩を書き写して送った。ジョンソンによれば、このようにして人に送られた詩の数は、スーザン・ディキンソンに276篇、ヒギンソンに102篇、ポウルズ夫妻に37篇など、計581篇となっている。また、ディキンソンは、パケットの詩をコピーするのではなく、新たに書いた詩を複数の人に送ることもしたので、これらを含めて、彼女が人に送ったことによって複数の原稿が存在することになった詩は357篇を数え、これは全作品の約20% (全異稿の約39%) に相当する。しかし、『ED詩集』では、機械的にパケットの詩 (以下「パケット稿」と称する) を採用稿、人に送られた詩 (以下「手紙稿」と称する) を異稿とすることはしていない。357篇のうち、パケット稿が採用稿となっているものは半数強(192篇、約54%)、手紙稿が採用稿となっているものは半数弱(165篇、約46%)である。

ディキンソンは、人に送るためにパケットの詩をコピーした時、句読点にいたるまでまったく同じとなるように書き写すことはほとんどしなかった。たとえば、彼女はパケット稿では連分けとなっている詩でも手紙稿では連分けにしないことがしばしばあった。パケット稿と手紙稿との間に見られる違いは、連分けの有無を含め、行分け、大文字、小文字、ダッシュ、コンマ、ピリオド、感嘆符、引用符、イタリック、下線等の使用の有無など表記に関わるものがほとんどである。例として “Like her the Saints retire,” (60番) を見てみよう。

パケット稿 (採用稿)

Like her the Saints retire,
In their Chapeaux of fire,
Martial as she!

手紙稿

Like *her* the Saints retire —
In a Chapeau of fire —
Martial, as she,

Like her the Evenings steal
Purple and Cochineal
After the Day!

“Departed” – both – they say!
i.e. gathered away,
Not found,

Argues the Aster still –
Reasons the Daffodil
Profound!

Like her, the evenings steal
Purple and Cochineal
Unto the Day.
“Departed both”, they say –
i e gathered away!
Not found!
Argues the Aster still –
Reasons the Daffodil
Profound!

編者の注によれば、このふたつの原稿はともに1859年頃に書かれ、手紙稿は鉛筆書きで、スーザンに送られたものである。両稿の間の違いに注目してみると、まず、パケット稿が1連3行4連分けであるのに対して、手紙稿は連分けされていない。両稿の1-9行において、コンマ、ピリオド、ダッシュ、感嘆符の相互変更が見られる。手紙稿では“Evenings”が小文字になり、“her”と“Martial”にイタリックを意味する下線が施されている。さらに、“their Chapeaux”が“a Chapeau”に、“After the Day!”が“Unto the Day.”になり、7行目の“both”が引用符の中に入っている。この詩は、ディキンソン得意の謎々形式の詩に属するもので、「火の帽子をかぶった聖人が堂々と退場するように」あるいは「夕べが紫色とコチニール色をして静かに去っていくように」去っていった「彼女」が何を指すのか、太陽なのかあるいはスーザンか誰か人のことなのか、去っていったのはただ単に別れていったのかそれとも死んでしまったことを意味しているのかは、結局のところ読者にはわからない。しかし、両稿の間の変更の結果、たとえば“both”を引用符の中に入れるなど、総じて手紙稿の方がこの詩の意味をよりはっきりさせるものとなっているようだ。また、手紙稿で“her”と“Martial”がイタリックになっているが、イタリックの一般的な機能が強調を示すことにあるとすれば、特に「彼女」を強調した部分に手紙としてのメッセージが隠されていると考えることもできる。この両稿のどちらが先に書かれたものであるかを断定する材料はないとは言うものの、手紙稿がパケット稿を書き写したものであると考えてはば差し支えないだろう。とすれば、この時、彼女は自分の書いた詩を読み手の目で推敲すると同時に、これに私信としての任務を托したことになる。編者がこの両稿のうちパケット稿を採用したのは、後に見る採用稿決定の原則に従ったことである

うが、採用されなかった手紙稿からも十分興味ある意味を汲みとることができるというひとつの例をここに見ることができる。

なお、ディキンソンの詩の複数の原稿が、ポケット稿と手紙稿としてではなく、ポケット稿とワークシート稿として存在する場合がある。少数ながらこれらも採用稿以外の原稿としてここに分類しておく。

C. 採用稿に代替語句 (suggested changes) の記入がある詩。

ディキンソンの詩の原稿は、代替語句等の書きこみがまったくない完成稿 (fair copies) か、代替語句等の書きこみのある半完成稿 (semi-final drafts) か、紙片に鉛筆書きされた粗原稿であるワークシート稿 (work-sheet drafts) のいずれかの形で存在している。ジョンソンによれば、現存する自筆原稿のうち、3分の2 (1183篇) は完成稿、約300篇は半完成稿、約200篇はワークシート稿である。⁹⁾ ここに分類する異稿は半完成稿すなわち代替語句や行の書きこみを持つ採用稿のことである。

前述したように、ディキンソンは、書いた詩を清書してポケットに収めた後、折に触れてはポケットを開いて詩の改作を試みた。こうした改作の試みの跡は、改める必要があると思った個所に×印をつけ、多くの場合そのシートの最下部に代替語句を記入するという形で残っている。このような異稿は採用稿の中に585篇あり、1775篇の約三分の一 (33%)、全異稿の約三分の二 (63%) を占める。代替語句の書きこみがある採用稿は、1861年以前は215篇のうちわずか6篇だが、1861年以後は急速にふえ、特に1864年まではディキンソンがポケットの詩の推敲を熱心におこなったことを示している。

代替語句等の書きこみは、1語でしかも単に冠詞や前置詞を変更する程度のものから、数行の代替行、十数語の代替語が与えられていることもある。ディキンソンが書いた詩をポケットに集めることをやめたと思われる1867年以降は、ワークシート稿段階の原稿が多くなり、それとともに、極端な書きこみも残されるようになった。例を挙げてみよう。

1420

One Joy of so much anguish	1. Joy]	Sound	
Sweet nature has for me	6. Quick]	ripe	Step of Day
I shun it as I do Despair		peal	Bells of Day
Or dear iniquity -		Drum	tick
Why Birds, a Summer morning		Drums of Day	shouts
Before the Quick of Day		Bells	Pink of Day
Should stab my ravished spirit		Bomb	Red of Day

With Dirks of Melody	Burst of Day	Blade of Day
Is part of an inquiry	Flags of Day	
That will receive reply	10] Delaying it's reply	
When Flesh and Spirit sunder	11. When Flesh]	till Flesh
In Death's immediately -		

上記左欄の詩は、ディキンソンが1877年に1枚のノート紙に鉛筆で書きつけたものであり、これ以外に原稿はない。右欄は、いつの時期かさだかではないが、彼女が改作を試みて記入した代替語句および代替行である。この詩の意味はおよそ次のようであると思われる。「自然は苦悩を孕んだひとつの喜びを与えてくれますが、私は絶望や不正を拒否するように、それを拒否します。夏の朝、なぜ小鳥たちが旋律のナイフで私の心を突き刺すのか、この疑問の答は私が死ぬ時に与えられるでしょう。」

代替語句等をとおして、ディキンソンの改定の意図を推測してみよう。1行目の“Joy”を“Sound”という語に変えようとしたのは、この「喜び」とは小鳥の鳴き声もたらす喜びであるということにより明確にするほうがよいと思ったからであろう。“Sound”では「苦悩の喜び」という矛盾統語法的な効果が失われるが、詩の意味を明確にする働きはある。同様に、10、11行目の改定も、「その答は肉体と精神が死によって分けられるまではわからない」となって意味をよりはっきりさせる働きをしている。だが、問題は上記右欄に示した6行目の“Quick”という語に対する15もの代替語だ。ディキンソンはなぜ“the Quick of Day”を変える必要を感じたのだろう。同種の表現は、“the Quick of Woe” (509番) や “the Quick of Skill” (545番) としてすでに使ったことがあるし、“the Quick of ...” という句の慣用的平凡さに飽きたらなかったのであろうか。そう言えば、代替語の“peal,” “Drum,” “Bell,” “Bomb,” “Burst,” “shouts”などはすべてより強烈な響きを持つ音を表わす語であるし、“Flags,” “Pink,” “Red”は色彩鮮やかなイメージだ。このことから、ディキンソンは、詩の改作にあたって、より衝撃性の強い語を好んだのだということを一般的原則として導きだすことが可能なのであろうか。ディキンソンの詩の代替語句は、たとえばこのような疑問を明らかにしたいという気を起こさせる。

3. 採用稿の決定

前項で見たような形態を持つディキンソンの異稿を細部にわたって考察する前に、もうひとつ明らかにしておかなければならないことがある。それは、ある詩に複数の原稿がある場合、どの原稿を採用稿とし、どの原稿を異稿とするかという問題だ。パケットの完成稿を採用稿と

するのか、一番最後に書かれた原稿を採用稿とするのか、それとも詩としての完成度を総合的に判断して採用稿とするのだろうか。これには詩の創作年の推定という問題も関係してくるから、『ED詩集』の编者にとっては、採用稿の決定は非常に困難な作業であったことは容易に想像がつく。しかし、採用稿決定の原則について、ジョンソンは次のように記しているのみである。

どれを採用稿とすべきかテキストに選択の余地がある場合は、もっとも早く書かれた完成稿を採用した。この原則にも例外はある。ある特定の年の中ならば、次の順である。

- (a) 受取人に送られた完成稿
- (b) その他の完成稿
- (c) 半完成稿：しかし、パケットの優位性がはっきりしている時は、(b)と(c)の順序はパケットの優位性に応じて下位区分した。
- (d) ワークシート稿¹⁰⁾

しかし、ジョンソンの採用稿決定の原則にはいまひとつはっきりしないところがある。ジョンソンは「どれを採用稿とすべきかテキストに選択の余地がある場合は、もっとも早く書かれた完成稿を採用した」と言うが、事実は必ずしもそうではない。たとえば、“My River runs to thee —” (162番)の場合、3種類ある完成稿のうちふたつのパケット稿は1860年に書かれ、ひとつの手紙稿は1861年に書かれているのに、採用されているのは1861年の手紙稿である。そこで、『ED詩集』の採用稿、異稿を詳細に検討することによって、その原則を推定してみることにした。その結果、ジョンソンの採用稿決定の方針にはおよそ次のような事実が指摘できることがわかった。

1. 原稿が1種類しか存在しない場合は、当然のことながら、これを採用している。1種類の原稿しか持たない採用稿は、1418篇（全採用稿の約80%）である。この中には、半完成稿やワークシート稿も含まれる。

2. 複数の原稿を持つ357篇（全採用稿の約20%）の詩については、原稿が完成稿と半完成稿かワークシート稿として存在する場合は、完成稿を採用している。

3. 複数の原稿を持つ詩のうち、原稿がパケット稿および手紙稿として存在する266篇の詩については、パケット稿と手紙稿が採用稿とされている割合はそれぞれほぼ半々であった。

ジョンソンによれば、ある特定の年の中ならば(a)完成稿の手紙稿、(b)完成稿のパケット稿の順で採用されているはずだが、事実は必ずしもそうはなっていない。たとえば、“Exultation is the going” (76番)では手紙稿が採用してあって、注で「原稿は2種類あり、ともに1859年に書かれ、テキストは同一。上に再現したもの(H254)は鉛筆書きで、スーに送

られたものと思われる」¹¹⁾とあって、次にパケット3の異稿が紹介されている。しかし、続く“I never hear the word ‘escape’” (77番)では、「原稿は2種類あり、ともに1859年に書かれ、テキストは同一。上に再現したものはパケット3にあったもの」¹²⁾とあって、下に鉛筆書きの手紙稿が異稿として紹介されている。これで見ると、パケット稿と手紙稿がともに完成稿である場合、そのどちらを採用稿とするかについては一定の原則はないと言わざるを得ない。ジョンソンの採用稿決定の方針は、あくまでも一応の方針として理解すべきである。

4. 全般に、半完成稿、ワークシート稿を含め、原稿を比較検討して、比較的完成度が高いと認められた原稿を採用稿としている。たとえば、原稿が複数の手紙稿としてのみ存在する場合(23篇)は、完成度が高いと認められた原稿を採用稿としている。ただし、編者は審美的判断は極力避けているように思われる。

しかし、ディキンソンの詩の完成度を問題にする時に忘れてならないことは、ある詩の複数の原稿の中から完成度が高いものを採用稿にするといっても、それはあくまでも「比較的」完成度が高いに過ぎないということだ。極論すれば、ディキンソンの詩の多くは、たとえ採用稿といえども、完成途上にあるということができるのである。

たとえば“A prompt – executive Bird is the Jay –” (1177番)を見てみよう。1865年頃、ディキンソンは次の詩(A)を書いてパケット90におさめた。

(A)

A bold, inspiring Bird
Is the Jay –
Good as a Norseman’s Hymn –
Brittle and brief in quality
Warrant in every line.

Riding a Bough like a Brigadier
Confident and straight –
Good is the look of Him in March
As a Benefit

6年後の1871年に、彼女はこの詩の改訂を試みて、次の(B)を書き、パケット38に入れた。

(B)

A prompt – executive Bird is the Jay –

Bold as a Bailiff's Hymn –
 Brittle and Brief in quality –
 Warrant in every Line –
 Sitting a Bough like a Brigadier
 Confident and Straight –
 Much is the Mien of Him in March
 As a Magistrate –
 4. Warrant] Business –

ディキンソンは、この改作後、ほぼ同じ時期に (B) を書き写して、スーに送った。スーに送られた版 (C) は、2 連に分けられ、大文字が小文字に変えられているほかは (B) とまったく同じである。(B) を書いたあと、どのくらいあとかはわからないが、彼女は (B) の最後の 2 行を (A) のそれに再び戻すという改訂を試みている。つまり、“Much” “Mien” “Magistrate” という語を横線で抹消し、“Good” “look” “Benefit” という代替語を書きこんだのである。もしこの改訂を採用するなら、次のような (D) ができあがっていたことだろう。

(D)

A prompt – executive Bird is the Jay –
 Bold as a Bailiff's Hymn –
 Brittle and Brief in quality –
 Warrant in every Line –

 Sitting a Bough like a Brigadier
 Confident and Straight –
 Good is the look of Him in March
 As a Benefit –

ジョンソンは、「これら 3 つの版のうち “final” といえるものがあるとすれば、最後に書かれたものではないけれども、スーに送られた (C) がそれにもっとも近い」¹³⁾ と考えて、(C) を採用稿としたが、ディキンソンにとっては、(D) が「最終稿」であったかもしれないとも言えるのだ。

ディキンソンの詩の複数の原稿からひとつの採用稿を決定する場合、そこに一定の明確な原

則があることは望ましいことではある。しかし、ディキンソンの創作の軌跡をたどろうとする本研究では、詩の創作年代はたしかに重要な意味を持つけれども、採用稿決定の厳密な原則はさほど重要な意味を持たないということもできる。なぜなら、この場合必要なのは、採用稿だけでなく不採用稿をも含めたこの詩人の詩の全原稿だからだ。

4. おわりに

ディキンソンの詩の異稿を考察するにあたって、本稿は、まず、対象とするテキストである『ED詩集』成立の過程、異稿の定義と形態、採用稿決定の原則を検討し、典型的な例を取りあげて異稿の持つ意義を考察した。

次稿では、1) 採用稿がふたつの異なる版を持つ詩、2) 複数の原稿を持つ詩、3) 代替語句を持つ詩のそれぞれについて、異稿間の詳細な比較検討をおこなって、異稿間に働くさまざまなメカニズムを考察したいと思う。

注

- 1) *The Poems of Emily Dickinson*, 3 vols., ed. Thomas H. Johnson (Cambridge: The Belknap Press of Harvard University Press, 1955)
- 2) *Poems*, II, p.150.
- 3) ディキンソンが残したひも綴りの小冊子の呼称については、妹ラヴィニアは“volumes,” トッド夫人は“volumes”あるいは“fascicules,” Milicent Todd Binghamは“fascicles,”そしてR. W. フランクリンは“fascicles”と言い、“loose sheets”を“sets”と称した。現在では、“fascicles,” “sets”が一般に用いられているが、本稿では、ジョンソンの『ED詩集』を基本とするので、「パケット」を用いることとする。
- 4) *Poems*, I, p.lxv-lxvi.
- 5) *Poems*, I, p.lxi.
- 6) *Poems*, I, p.xxxi.
- 7) ふたつの異なる版がそのまま採用されている詩は、次の10篇である。
216, 433, 494, 824, 1213, 1282, 1357, 1358, 1502, 1627
- 8) 独立した詩として採用されているながら別の詩の一部に組み込まれている詩は次の4篇である。
331→342, 937→992, 1574→1586, 1576→1584→1588
- 9) *Poems*, I, p.xxx.
- 10) *Poems*, I, p.lxi.

11) *Poems*, I, pp.61-62.

12) *Poems*, I, p.62.

13) *Poems*, II, p.822.

The Trace of Composition
— A Study of Emily Dickinson's Variant Readings (1) —

Katsuhiko INADA

The Poems of Emily Dickinson edited by Thomas H. Johnson includes “variant readings critically compared with all known manuscripts.” Dickinson scholars have usually treated those variant readings as mere referential materials for their study, but we assume that a new possibility will develop in Dickinson studies if we regard them as part of Dickinson's texts which is no less important than the poems adopted in *Poems*.

What will a study of Dickinson's variant readings reveal? We presuppose that it will reveal the actual conditions of her creative activity. Dickinson's different manuscripts and suggested changes are the documents which tell us how she led a life of a poet writing and rewriting poems and sending them to her relatives and friends. It will also reveal her creative process from the initial stage of composition to the final stage. Most importantly, it will reveal the poet's thoughts, psychology and verbal consciousness that worked when she was engaged in rewriting her poems. It may further reveal the influences of past or contemporary poets, and even Dickinson's gender consciousness.

The present paper reports only the preliminary work in tracing Dickinson's creative activity. First, the problem of the text was considered. Then the ‘variants’ of the poems were defined and classified. Finally how the editor of *Poems* adopted the poems out of different manuscripts was observed.

Since about 48% of Dickinson's poems do not have any form of variants, about 52% of the 1775 poems deserve our examination. By ‘variant readings’ we mean not only those poems with suggested changes, but also those manuscripts which were not adopted in *Poems*.

The 585 poems which have suggested changes deserve close examination because the suggested changes in them give the reader interesting clues to the working of a poetic mind. To take “One Joy of so much anguish” (P-1420) for example, we can infer from its 18 suggested changes that Dickinson wanted to make the meaning of the poem clearer or that, not satisfied with the banality of ‘Quick of Wo,’ she wanted to use stronger or more shocking words.

The unadopted manuscripts of the 357 poems also deserve attention. Although most of

the changes between the different manuscripts of a poem are changes in form such as stanza division, line division, the use of capital letters, commas, periods, dashes, exclamation marks, quotation marks, italics and underlines, there are many other significant changes which may suggest, for example, the character of a private message of a poem.

A detailed examination of the variant readings will be made in the next paper.